

FADO

55

Abril 2008

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDECO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

「インディペンデント INDEPENDENTE」(日本語で「独立した」「自立した」という意味)、最近この言葉をよく使う。何となく日本語より響きがいいところが気に入っている。「インディーズ」(自主制作盤の事。レコード会社に依存せず、アーティストあるいはプロダクションが独自に行うCDリリースの形態。それに対して、レコード会社が制作し正規のルートで販売するものをメジャーと呼ぶ。)もそこから来ていることに最近気がついた。インディーズというのはレーベルの名前の一つだと長年思っていた。

私は、勝つとか負けるとかの土俵にはもともといない
だから負け犬の遠吠えもあり得ない
月に吠えるのは孤独な魂だけだ
そう自分に言い聞かせて眠りにつく

眠りと言え、リスボンの定宿のフロントのセニョールが、「眠い」という私にこう言ってほほ笑んだ。「死んだらいくらでも眠れるよ」そして、久しぶりにお会いした関西の月田ファン歴37年の中野蜜杖師は、余命4か月と宣告され、それを目下、着々と更新中という。顔を輝かせながら、こう言った。「よく眠るようになったよ。そして、眠れるというのは生きている証拠なんだよな」。師は今年数えて92歳になるという。

2月28日、帰国後3日目の朝7時過ぎに目が覚めると頭痛がした。薬を飲んでまたぞろベッドにもぐりこんだ。11時過ぎに、なんとか起き上がってデスクに向かった。リスボン時間を未だに刻んでいる時計は、午前2時23分をさしている。そろそろ「ネロ」でのライブが始まるころだ。

「ネロ」は何と夜2時から朝6時過ぎまでやっているファド酒場(ファド・ヴァディオーいわゆるファド好きの集まるバー)だ。3年ほど前から行ってみたいと思っていたバーだが、いかにせん時間が時間で一人では足を向けることができなかった。今回は同行のポルトガルギターの飯泉さん(これから「マサ」と呼ばせてもらう。彼は昌宏というちゃんとした名前を持っているが、ポルトガル人には発音しにくいので、愛称「マサ」に決めた。(massaはパスタ、そばの意味、maçãはリンゴを意味するポルトガル語である)彼が、日本人の男性ファド歌手の高柳氏に連れて行ってもらったことがあるということで、ギターの渡邊さん(彼は英一という名前をそのまま使って「エイチ」と呼ぶことにした。ちなみにHはポルトガル語ではアガと読む)と共に、真夜中のカフェテラスで特大のハムチーズホットサンドとビールで腹ごしらえしてから、宿願の店ネロへ向かった。

リスボンでは、徹底したレストラン等での喫煙禁止令が出された中で、その店だけは例外だった。よほど「やくざ」な人たちのたまり場かと思いきや、客は、夫婦連れ、カップル、グループ、常連らしい一人客一族郎党、煙草の煙を除けば健康的な雰囲気だ。もちろん観光客は一人もいない。ギターのヴィタル、ポルトガルギターのワンデルレイと初対面の抱擁のあいさつをして、彼らと一緒に奥のテーブルにつかせてもらう。

次から次へと客が挨拶に来てくれる。我々珍客にファドを聴かせたくてむずむずしているらしい。そして、ギター、ポルトガルギター、ファド論が飛び交う。「ギターは教えてくれるところがあるけどポルトガルギターはない、それだから一番難しいのはポルトガルギターだ」「いや、一番重要なのはヴィオラ(普通のギター)で、しかもテンポを一定に保たなければならないのはかなり難しい事さ」「どっちにしても歌手の息を感じながら演奏しなければならない、

歌をまず覚えること、何度も繰り返し弾いてゆくことが大事だよ」等々、本場ならではのファド談議。ファドは理屈じゃないということだけはおおむね共通した見解のようだ。

「おいらは貧しい家に生まれ、いまでもそれは変わらないけど、喜びがひとつだけある。それはこうして仲間たちとファドを歌うことさ」と歌いながらトイレから出てきたおじさんが熱っぽく語った言葉が忘れられない。「音楽とか発声とかは習って練習さえすれば、マスターできる。ただファドを歌うにはもっと心の底からあふれ出る想い、そしてそれをそのまま吐き出すことが大切なんだ。きれいな声とか、うまく歌う技術なんて愚の骨頂さ。わかるかい、これをこれだけを言いたい、そのことが大切なさ。それがなければファドを歌う必要なんてないだろう。」こんな時間に、アルコールが混在した頭でこんなことを言えるというのは、普通じゃない。まさに彼はファドと共に生きている人だと思った。

その間に、明かりが消され、カウンター赤いランプだけが灯り、たばこの煙が漂う暗がりの中で、ファドの歌声が響きわたり、夜が明けて行った。不思議と時間がたつのが速く感じられた。気がつくとも6時を回っていた。いかにせん歩くのも面倒でタクシーを拾った。「ボンディア(おはよう)」と運転手にあいさつすると、空を仰ぎながら「たぶんね」という笑みを含んだ答えが返ってきた。

結局、マサとエイチはそれから帰国する直前まで4日間ネロのハウスバンドと一緒に演奏することになった。最終日は途中で演奏を切り上げ、急ぎ空港へ向かった。朝6時半発の英国航空に乗り込んでも、目をつむると、ネロでの喧騒とファドの歌声とギターの音が鳴っていた。あんなにいやだった煙草の煙さえもが懐かしく、この音においが、いつまで私の中に残っているのだろうか、ファド演じて過ごした10日間を思い返した。ロンドンのヒースロー空港で飲んだギネスビールのクリーミーな泡がたちどころにすべてを流していくようだった。日本へ向かう機上では、モルトウイスキーを二本ぐっと飲み干して(ただし、ミニチュア瓶)、誘眠剤と睡眠持続剤を飲んだ。成田空港に降りた時は、すでにリスボンは遠く、10日間がまるで夢のように思えた。

旅人から現実へ戻るには精神的にも肉体的にも、いままでもなくかなりの時間がかかった。ただひとつ、「歌いたい」という想いが久しぶりにあふれている。いろんなファドがあっという間だと、そして私には私のファドが確かにあるのだと思えるようになったからかもしれない。



リスボンのファド酒場にて。
手前から渡邊(G)、ヴィタル(G)、ワンデルレイ(PG)、飯泉(PG)

ヴィンセスラウ・モラエスのドキュメンタリーフィルム

リスボンのシャンゼリゼ通りとも呼ばれているリベルダーデ大通りを、テージョ河を背にして上った坂の中腹にある「サンジョルジュ劇場」で、モラエスの足跡を辿ったドキュメンタリーフィルムを観た。昨秋、日本のファドシーンを求めて来日したジョルジュの招待だった。彼はニューヨークに住んでいるが、今回、私のリスボン訪問に合わせてニューヨークから飛んできてくれた。

内容は、1982年日葡共同制作の映画「恋の浮島」の監督パウロ・ロシヤが、1898年から31年間、日本に在住し日本文化を紹介し続けたヴィンセスラウ・デ・モラエスゆかりの地を訪ね、モラエスを慕う日本人にインタビューしたドキュメンタリーだ。1975年から1983年まで、在日ポルトガル大使館の文化参事官を務めていたパウロ・ロシヤ監督はすべて流暢な日本語でインタビューをしている。字幕はもちろんポルトガル語だ。徳島出身の瀬戸内寂聴のインタビューシーンもあった。モラエスが晩年を過ごした徳島では、当時明治時代の大方の日本人のモラエスへの認識は「西洋乞食」であり、「日本精神」「徳島の盆踊り」等、当時の日本の生活、習慣等をポルトガル人の目で見た素晴らしい著作があることなどは当時のモラエスの周囲の人たちは知る由もなかった。

モラエス生誕150年に当たる2004年、私は、モラエスをモチーフにしたコンサートを堺能楽会館で催した。当時、私は、モラエスの作品を読み進むうちにいわゆる「モラエス病」に罹ってしまったようだった。それはなんとも儚い人生を、思い出とともにただ一人歩みを進める寂しくも甘美な病だった。

てんぷらバンド“BANDA TEMPURA”との遭遇

リスボン滞在中、例の「ネロ」で、22日深夜というか、23日早朝というか、私が歌い終わると、20歳前後の若い子達が私の周りを取り囲み私の名前を尋ねた。すると彼らはすでにインターネットのホームページで私の歌を聴いているという。偶然の出会いにかなり興奮気味だ。なんと、彼らは、日本のアニメの主題歌を日本語で歌っているという！その名も「Banda Tempura (天ぷらバンド)」！

帰国してすぐに彼らのホームページを訪れ歌も聴いた。派手なエレキのサウンドと共に流れてきたのは、女の子のヴォーカル、それもかなりの早口の完璧な日本語のアニメの歌だった。帰国後、彼女からメールが届いた。「日本語で日本のアニメの歌を歌っているポルトガル人と、ポルトガル語でポルトガルのファドを歌っている日本人との出会いなんて想像だ



若きテンブラ・バンドのメンバー達と。リスボン「ネロ」にて。

にしない出来事でした。

時々運命はおかしいはずらをするものですね。」まさに同感だ。

若いキャラクターの日本のアニメの歌に彼女は魅かれ、ポルトガルの魂の歌ファドに私は魅かれた。世代を超え、国を越えて私たちは繋がっているような気がした。日本人とポルトガル人、歴史も文化も違うけど、感受性をほんの一部共有しているように思えてならない。

ドキュメンタリー映画「遍歴 PEREGRINAÇÕES」

昨年、7月に月田を密着ロケした映画が3月31日リスボンの「シネマテカ」で上映されるということ、若手監督ヌーノ・ビーレスから聞いた。彼らが来日した時は、私の体調が最悪の時、かれらにもその事情を了解してもらった上で撮影した作品だ。私は、抗うつ剤、抗精神剤、精神安定剤を飲んでなんとかインタビューにも臨んだ。パリから来たナタリーはことのほか私の体調を気遣ってくれたので、かなり精神的に楽に撮影に臨めた。

私はまだ観ていないので何とも言えないが、若手監督の熱意を伝えるべく、日本での上映に最善を尽くしたいと思っている。その節は、ファンの皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



音楽の普遍性について

飯泉昌宏

そもそも人生は切ない、しかし希望もある、楽しさも夢もあるものです。その部分は、少なくとも人種や生活している文化圏にかかわらず人類共通の事実であろうと思います。

それを普遍的な形で具現化した芸術のひとつが音楽です。

タンゴやファドというジャンルは、明らかに地域限定の芸能として発達してきた音楽ですが、人間であれば持っているであろう普遍的な人生観を写し出しているという点では、地域限定ではなく世界共通の感情を当然内包しています。

われわれは、最初は、自分では気付かなかった(けれど持っていた)感情を呼び覚まされるショックによってそれらの音楽に惹かれますが、その後は、その音楽のもつ普遍化された部分が大きな牽引力となってわれわれの心を捉えて離さない…となるのだと思います。

異国発祥の音楽には、発信側と受信側の感受性のギャップはいつでもあり、地域性に依存する部分の要素をわれわれリスナーがどれだけ正確に受け止められるのか？については、いったい何を正確とするのかという基準も定かでないために「ずれて受け取ってる部分はあるんだろうな」としかいえません。

そうしたコミュニケーションギャップというのは、人間対人間にはいつでも、たとえ同じ日本人同士でもありうるわけですから、あって当然、なければ不自然くらいに思っていればいいでしょう。

ですから、その部分に関しては、何が正確なのか？を常に検証しながらつきあっていけばいいし、そうすることが音楽への、あるいは音楽家たちへの礼儀であると思います。

演奏する立場としてのわれわれを考えてみます。

ジャンルとして確立されている音楽は、ひとりの天才によって生み出されたものではありません。無数の無名の音楽家によって裾野が広げられ、時には天才がそれを大きく発展させ、また、多くの音楽家によって敷衍され、というルーチンで成立するものです。

楽器の演奏について言うならば、それを自分の表現手段として実用になるレベルまで持って行くには、試行錯誤の過程や当たりまえの練習が相応に必要です。

音楽の存在意味とリンクして考えれば、自分の演奏に普遍性があるのかどうか、は重要な問題です。普遍性をめざす過程で、どうしようもない個性の発露というものがあるものでしょう。つまり、普遍性をどう生かすか？どうとらえているのか？という問いに答えるのが個性であるように思えます。

意味があるのか？普遍性はあるのか？ということは常に考えていきたいと思えます。

わかる人にはわかるし、わからない人にはわからない、というのも話としてはありますが、そうやってしまっはつまらない。

心を共有したい、一緒に感じたい、ともにいたい、というのが音楽の基本、つまり普遍性にかかわる部分です。

【昨年4月からポルトガルギターで月田のファド活動に参加してくれている飯泉氏のホームページのブログから、本人の承諾を得て、引用させていただきます。特に最後の一節が月田が好きな表現です。

今回のリスボン滞在では、かなりの収穫があったようです。それを刈り取る作業に彼は真正面から取り組んでいるところでしょう。それをするかしないか本人の気力が問われるところです。これからの演奏に注目してま。そしてこれからも私を助けてくださいな、マサさん。(月田)】



ポルトガルギターの師アントニオ・シャイニョ氏と、リスボンの自宅にて

fados canções

NÃO É DESGRAÇA SER POBRE

Norberto de Araujo
José Branco

Não é desgraça ser pobre
Não é desgraça ser louca
Desgraça é trazer o fado
No coração e na boca

A moradia de prata
Vale menos de que é de cobre
Se a pobreza não nos mata
Não é desgraça ser pobre

Nesta vida desvairada
Ser feliz é coisa pouca
Se as loucas não sentem nada
Não é desgraça ser louca

Ao nacer trouxe uma estrela
Nela o destino traçado
Não foi desgraça traza-la
Desgraça é trazer o fado

Desgraça é andar a gente
De tanto cantar já rouca
E o fado teimosamente
No coração e na boca

貧しさをいとわず

訳詩：月田秀子

貧しいことは不幸ではない
変人であることも不幸なんかじゃない
不幸とは心や口に
運命を引きずること

銀のねぐらなんて
銅ほどの値打ちはありやしない
貧困は私たちから輝きを奪いやしない
とすれば 貧しさは不幸なんかじゃない

このおぼつかない人生に
幸せであることなど滅多にない
もし変人は何も感じないのであれば
変人であることも捨てたものじゃない

生まれながらの星があり
それには運が刻まれている
その星を持って生まれたことに不幸はない
不幸とはその運命を引きずること

運命をさんざん歌い歩き声をからすこと
運の悪さを後生大事にひきずって
愚痴のはげどころにすること
これこそが 不幸というもの

informação

- 昨年末から隔月ライブをさせていただいている「カーザ・デ・ケージョ (ポルトガル語でチーズの家の意)」は、会員である斉藤敏明氏のお店です。15人入ったら一杯という小さなお店です。美味しいチーズとポルトガルワインで楽しい会話がはずみます。
JR恵比寿駅東口から徒歩15分のところにある素敵な日本初の本格的チーズバーです。
- 早耳情報：7月13日(日)に北海道ニセコの「甘露の森」でコンサートの予定。会員の土井氏が孤軍奮闘画策中です。
- 毎月一回ファドライブを続けさせて頂いている渋谷の「マヌエル」ですが、5月からディナーコースの代わりにお客様のお好きなポルトガル料理をご注文いただいて、ワインを傾けながらの語らいとファドをお楽しみいただけるように致しました。20席ほどの小さなお店でファドに酔いしれてみませんか?ギタリスト共々お待ちしております。

<2008年4~7月の月田秀子のスケジュール>

4月 7日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：17:00 ①20:30 ②21:30 (各ステージ30分)	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
8日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
9日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.54」 開場：18:00 ①20:30 ②21:30 ③22:30	(各ステージ20分) ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
29日(祭)	東京・赤坂「ノヴェンバイレブンス」 開場：17:00 ①18:30 ②20:00	予約・問合せ：tel / 03-3588-8104 ライブチャージ：3,500円 (入れ替えなし)
5月 4日(日)	千葉・柏「Studio WUU」 開場：13:30 開演：14:00	予約・問合せ：tel / 047-164-9651 前売り：2,800円 当日：3,000円 早割：2,600円 (3/31迄)
12日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：17:00 ①20:30 ②21:30 (各ステージ30分)	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
13日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
14日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.55」 開場：18:00 ①20:30 ②21:30 ③22:30	(各ステージ20分) ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
22日(木)	埼玉・浦和「嬉族in」 *要予約 開場：18:30 開演：19:30	予約・問合せ：tel/048-833-7128 料金：6,000円 (食事・ドリンク付) 2回ステージ (入れ替えなし)
31日(土)	東京・恵比寿「カーザ・デ・ケージョ」 *要予約 開場：18:00 開演：18:30	予約・問合せ：tel / 03-3473-5525 会費：5,000円 (ドリンク・チーズ付)
6月 2日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：17:00 ①20:30 ②21:30 (各ステージ30分)	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
3日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
4日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.56」 開場：18:00 ①20:30 ②21:30 ③22:30	(各ステージ20分) ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
7月 7日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：17:00 ①20:30 ②21:30 (各ステージ30分)	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
8日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
9日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.57」 開場：18:00 ①20:30 ②21:30 ③22:30	(各ステージ20分) ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
19日(土)	神戸・三宮「サロン・ド・あいり」 *要予約 開場：18:00 開演：19:00	予約・問合せ：tel / 078-241-1898 料金：5,000円 (料理・ドリンク付)
20日(日)	大阪・大正「アゼリアホール」 開場：14:30 開演：15:00	予約・問合せ：tel / 06-6552-7053 (昼間) tel / 06-6552-3820 (夜間) チケット：3,500円 (前売り) 3,800円 (当日) ドリンク付

<編集後記>

10か月振りの会報。やっと一歩踏み出せた安堵感しきり。春が巡ってきました。皆様には、ご心配をおかけしました。あまり無理せずばち行きます。

どうか皆様も無理をせず月田を支えていってください。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
http://www.fado.jp/

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第55号
- 2008年4月1日発行 (季刊：年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒140-0014 東京都品川区大井7-14-2-301
- TEL&FAX 03-3776-6238